

## 私の弟は障がいを持っている

福島県立会津学鳳中学校 3年 鈴木 ゆめ花

私は障がい者が嫌いだ。そう思い始めたのは、小学生の頃だった。

私には発達障がいを持った弟がいる。同じ小学校に通っていた私は、弟が支援学級という周りとは別のクラスで過ごすことを笑い話にする同級生がいた。

「お前の弟、なんで違うクラスなんだよ。」

「頭悪いんだね。かわいそう。」

毎日弟のことを話題にしてくる同級生。さらに弟が学校で暴れ、大声を出し、先生に叱られていたりすれば、みんなの視線は私に集中した。そんな中での学校生活は正直耐えられなかった。

「なんで弟のことで姉である私が嫌な気持ちになっているのだろう。」

日々そんなことを考えるうちに、弟が居なければ良かったのと思うようになった。

弟のことで頭を抱えるのは学校だけではなく。家でも暴れる弟は、ある日些細なことで喧嘩をしたとき、包丁を付きつけてきた。当時の私にしてみればとても衝撃的で精神的に辛くなってしまった。

「弟なんか、障がい者なんか大嫌いだ。」

私は本気でそう思うようになった。

そんな私を変える出来事となったのは、弟の漫画にあった。弟は漢字や絵を描くことが小さい頃から好きだった。そこで弟は四字熟語の意味を漫画で分かりやすく絵にした創作漫画を暇があれば描いていた。テストの表にも裏にもぎっしり、自主学習ノートも何百冊に渡りひたすら描いていた。その絵は弟の独特なタッチと、人間の様々な表情がとても面白い。そしてその創作漫画で障がい者の方が応募できる芸術作品展で審査員賞を受賞したのだ。その光景を目の当たりにした私は

「障がい者だから出来ないではないんだ。」

と気付かされた。運動や集団行動が苦手だが漢字の知識は家族よりはるかにあるし、一生絵を描き続ける力は才能であり、個性だと思った。誰でも得意・不得意があり、出来ないことだけでなく、優れている面も沢山持っている弟、障がい者の方を嫌いだと言っていた自分が愚かで情けなく感じた。

この経験を通し、私は障がい者差別、偏見をなくし、誰もが障がいを理解すべきと思った。そしてこれは当たり前行動であると思う。障がい者だから出来ない、仕方ないではなく、それも一つの個性だと思う心を持つことが大切なのだと思った。

世界には何十億もの人が暮らしているが、誰ひとりとして同じ人間はいない。それぞれに個性があって、生きる価値がある。そんな人々の人権を尊重することは、とても大事なことだと思う。障がい者にも勿論一人ひとり性格があって、抱える悩みも違う。だがそれを貶すような行為があってはならないと思う。障がい者を理解し尊重する心を持つことは、当然のことであるのだ。

障がい者の姉として、家族として十五年間生きてきた私は障がい者だけでなく、その家族へのサポートも重要になってくると思った。弟が喧嘩をしたり、言うことを聞かなかったり、友達を泣かせてしまったり、周りの大人や知人からの心無い言葉などで、両親が苦しんでいる姿、沢山謝り頭を下げる姿、弟と話し合う姿、言い争いになる姿など、様々な姿を間近に見てきた。そしてそれは、ほぼ毎日に及んでいた。そこで私は障がい者とその家族のサポートが出来る教師になりたいと思っている。保護者の方が子育てにおいて悩みを打ち明けやすくなるような雰囲気のある先生になりたいと心の底から思うのだ。また、障がい者理解について、義務教育が始まる小学生のうちから教え、私のように嫌な思いをする方を減らせるようにしたいとも考えている。障がい者の方も、その他様々な悩みを抱える全ての人達が、生きやすく過ごしやすい社会になるように、小学校の先生として、今後の学習における基礎となる小学生の勉強をしっかり教えるだけでなく、障がい者理解などの人間として当たり前の道徳心を守ることでできる子供たちを育てていきたいのだ。

最後に、私は弟が障がい者で良かったと思っている。弟が居たからこそ、私は特別な経験ができたし、障がい者理解について日頃から考えるようになった。これを生かし、学問を身に付かせるのは勿論、その他世界中の人々と平等に差別・偏見をしない、まっすぐな心を持った子供たちを育てられる先生になりたい。一人の人間として、障がい者を理解し尊敬する心を忘れず、夢の実現に向けて頑張っていきたい。

私は障がい者が大好きだ。